HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 江藤淳の保守主義者への思想変容過程の考察 |
| Author(s) | 村部, 貴浩 |
| Citation | 国際広報メディア・観光学ジャーナル, 33, 23-41 |
| Issue Date | 2021-10-29 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/83313 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 04_murabe.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Jimcts



# 江藤淳の保守主義者への思想変容過程の考察

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院　博士課程
村部　貴浩

abstract

## An analysis of Jun Eto's ideological turning

MURABE Takahiro

It can be said that Jun Eto is a representative of conservative thinkers in Japan after the war. Until the time of the political struggle in 1960, Eto was seen as a progressive intellectual, but during his two-year study abroad in the United States from 1962 to 1964, he discovered "Meiji nationalism" in the United States, and after returning to Japan, he turned to conservatism with "Maturity and Loss," published in 1967.

The main theme of this article is to examine the process of Eto's ideological turn, which has not been revealed in previous studies, and as the subtitle, I will also focus on Eto's individual-oriented thought.

This is because I believe that by exploring this process, we can theoretically examine conservatism as well as Eto's study, which cannot be solved by an only viewpoint of the confrontation between the vulgar conservative and the liberal.

村部 貴浩 MURABE Takahiro

# 序章　問題の所在―江藤淳の思想変容過程について

江藤淳といえば、夏目漱石研究や勝海舟、山本権兵衛、西郷隆盛などの評論で著名な文芸評論家であり、明治の国家を理想とした戦後保守派の代表的論客の一人であったといえる。江藤の「明治」観は、のちほどくわしく考察するが、江藤について、江藤研究の有識者たちは以下のように述べている。

先崎彰容は江藤の戦後民主主義観について、「敗戦は敗北と屈辱感だけを、無惨に敗れ去り、戦前の秩序が崩壊したという事実だけを江藤に教えた」（先崎［2013：198］）と考えている。また浜崎洋介は江藤について、「戦後の現実が、江藤淳にとって満足に「国家」たり得たことは一度もなく、逆に、「喪失」を強い続けたものこそ戦後日本の「国家」だったのではなかったか。（中略）三島由紀夫のロマン主義を拒絶し、手段としての（国家＝現実）を引きうけていたように見える江藤淳は、しかし、その「私情」（詩情）においては常に、目的としての〈国家＝夢〉を希求し続けていた」（浜崎［2011：24-25］）と分析している。

以上の評価から、江藤は総じて戦後民主主義、戦後的価値観に懐疑的な戦前の国家に憧憬をもった保守主義者としてとらえられているといえるであろう。たしかにこれらの視点は、江藤の思想を考察する上で重要なファクターであるが、しかし、江藤の思想を理解するためにはそれだけでは十分ではないと筆者は考える。それは江藤の思想変容の詳細な研究が先行研究では看過されてきたのではないか、という視点である。

本稿は、江藤の思想変容過程について考察することを主たる目的とするが、その意図するところは以下である。江藤が文芸評論家として文壇にデビューした当初は、1957年に書いた「奴隷の思想を排す」の評論によって、戦後進歩主義者の共鳴者とみなされていた。そのような江藤の思想の転機となったのが、1962年から64年のアメリカ滞在を経て1967年に書いた「成熟と喪失」であり、ここで近代日本社会を「母の崩壊」という観点から論じ、そして、「母の崩壊」した社会において、「治者」としての生き方を説いたことによって漸次、保守主義者へと変容していったと考えられている。

何故に保守主義者江藤は生成したのか、あるいは生成せざるを得なかったのか。江藤の見出した「保守」の価値とは何か。その「転向」の過程をさぐることで、福田恒存と比肩する戦後日本の保守の代表とみられながら先行研究の少ない江藤研究に理論的に貢献できると考えるためである。そして、それは江藤研究にとどまらず、保守思想を理論的に考察することにもつながるだろう。

これまで江藤の思想変容の過程が顧みられてこなかった事情としては、「一九四六年憲法―その拘束」（1980年）、「閉された言語空間　占領軍の検閲と戦後日本」（1989年）などの国粋的ともみられる論文を発表したことにより、これらの評論から江藤にたいして、紋切型の保守反動というレッテルがはら

れたことが挙げられるだろう。これによって江藤への冷静な評価が妨げられ、江藤の思想変容の過程が関心をひかず看過されてきたといえるのではないだろうか。

橋川が述べるとおり、「保守と反動の区別は社会的実体と結びついて理解されるような条件がなかった」（橋川［1968：20］）と、日本において「保守」と反動の識別が困難な状況が存在したことはたしかである。

しかし、江藤の保守主義は、紋切り型の保守反動のイメージとは異なり、「穏健な保守主義」とでも形容すべきものであったといえる。実際に、江藤が有していた保守主義は、「保守」を理念だけではなく、現実に即して「感覚」としてとらえていたため、それ故に抽象論の陥穽に陥り「反動」に転じなかったのが特筆すべき点である、と筆者は考えている。

これらの問題意識を前提として、江藤の思想の変容をふまえて、第1章にて江藤が保守に「転向」する以前の進歩主義的文化人とみられていた時代の著作である「政治的季節の中の個人」を主に検討する。当時の江藤が「個人」を重視し、政治的原理の中に絡め取られてしまうことへ警鐘を鳴らしていたことに着目する。

そして、第2章では、第1節にて、江藤が2年間のアメリカ滞在を経て「文学」をはじめとする「明治」の価値を発見、あるいは再発見していく過程をみる。第2節では、帰国した江藤が、「成熟と喪失」により「治者」としての生き方を説き、保守思想家へ思想的に変容していく過程を考察する。第2節にて同書における江藤の「母の原理」と「父の原理」、「治者」としての生き方という江藤の重要概念の考察から後節に付随する江藤についての3つの論点を抽出する。第3節では、江藤の考える「父」「治者」「天」の関係とはいかなるものか、第4節では江藤は何故に「明治の文学」を重視していたのかを検討する。

以上をふまえて第3章では江藤の「保守」の新規性、江藤研究の意義とは何かを考察する。江藤自身の言説、先行研究の江藤評を引用し、筆者の結論を導きだし、この点を江藤研究における本稿の新規性としたい。

「成熟と喪失」の時期における江藤は、「近代」、とりわけ「戦後」における「個人」を「露出された孤独な個人」と形容し、「個人」が「国家」という超越者に忠誠を示すようにと、従前の「個人」を重視する思想から変容をみせている。何故に江藤は思想的変容をとげたのだろうか。江藤が見出した保守主義の価値とはいかなるものか。具体的な過去の時代として「明治」を想起し、「父」なき時代に「父」であるかのように生きる「治者」としての生き方を選択するにいたった江藤の思想変容を考察することを本稿の主題とする。

## 第1章　江藤における政治と個人について ―「政治的季節の中の個人」―

本章では、江藤の「政治的季節の中の個人」（『婦人公論』1960年9月）を中心に「転向」前の江藤の思想を検討したい。

中島岳志は江藤について、「保守派の論客の中で、アメリカとの関係を自らの実存と国家の問題として問い続けた（中略）江藤の生涯のテーマは「喪失」と「回復」だった」（中島［2017：278］）と分析している。

たしかに江藤にとって戦後は、「喪失」の時代であった。1950年の朝鮮戦争勃発により、それまでの日本の再軍事化は危険、と考えていた従来の方針からGHQの占領政策は方針転換を余儀なくされ、警察予備隊の発足から自衛隊の誕生、サンフランシスコ講和条約の調印、日米安保条約の調印、そして1960年5月に同条約の更新により、岸内閣の政治手法への批判と相まって、日本国内は政治の季節をむかえた。江藤自身も安保改正に反対を表明した若手文化人グループである「若い日本の会」のメンバーに名を連ねていた。このような60年安保騒動という時代状況の中で、江藤が安保の直後に書いた安保総括文が同論文であり、政治的季節における「個人」のあり方について論じている。

江藤は同論文において、「もともと私は政治に多くを期待しない（中略）ひとりひとりの人間の内面は孤絶している（中略）私は政治の奴隷にだけはなりたくない」（六17-18同書）（『江藤淳著作集』からの引用は、本文中に全集の巻数と頁を（　）にて表記する）と、政治を個人がひとりで生きひとりで死ぬことを保証するための一つの制度に過ぎないととらえ、政治への過度な期待を警戒した。そして、「私の主人は私以外にない」（六20）とも述べている。この言説にみられるように、江藤は「政治」の過剰を警戒し、「個人」が集団の中へ埋没してしまいたい欲求によって政治的原理の中に絡め取られてしまうことへ警鐘を鳴らしていたといえるだろう。

先述の中島の「国家」の問題を問う江藤という評価とは対照的に、小熊は「一九六〇年ごろまでの彼は、「国家」や「民族」よりも「私」をはるかに重視していた」（小熊［2002：683］と、この時期における江藤の「個人」重視の思想について分析している。

江藤は「人間の間の結びつきというものは、それが可能だとしても個人の自発的な意志と努力によって生れるものであって、それ以外の力によって生れはしないはずである」（六17）と、小熊が指摘するように、「個人」を重視する思想を示している。

しかし、江藤は「良心に従いながら個人でありつづけるということは殆ど不可能に近い。不可能に近いことを通そうとして砂を噛みつづけてきた」（六19）、「指導者はおそらく善意であろう。だが善意が人間の内面に侵入して良心を眠らせ、個人を全体のなかに解消してしまうという危険もある」（六20）と、「個人」が全体の中に埋没してしまい、「個人」の確立が非常に困難な60年安保騒動時の思想状況について危惧している。

「旧世代のオールド・リベラリスト」（註1）（小熊［2002：200-714］と異なり、江藤は「政治」の過剰を批判して軍部や「赤」を排除すれば、「個人」は安定した秩序に回帰できると楽観できるほどには、江藤は戦前の生活感覚を身につけていなかった」（小熊［2002：697］。ここには、オールド・リベラリストに代表される旧来の保守論者と江藤の世代における「個人」を重視する際の拠って立つ基盤の相違が存在する（註2）。

►1　その定義は、「戦前の中産階級の安定した生活のなかで自己形成をとげ、そこで培った価値観や生活感覚を基盤にして、戦後の社会変動を批判した」（小熊［2002-200、714］というものである。

►2　小熊は福田や竹内好と江藤を比較し、「江藤には福田のような伝統志向は希薄（中略）福田や竹内が背負っていたような、戦中の悔恨の傷は江藤にはなかった」（小熊［2002:689］と、オールド・リベラリストたちとの違いと同様に、世代の相違による認識の差を指摘している。

以上のように江藤は「個人」を重視する一方で、その思想的な拠り所を何にもとめるかという大問題に苦悩していたと思われ、次章で考察する2年間のアメリカ滞在を経て「成熟と喪失」の問題を論じるようになる必然性がすでに同書をあらわしたこの時期から内在していたともいえよう。

江藤の60年安保における「政治的季節の中の個人」に代表される言説は、「政治」の過剰を警戒し、集団の中に埋没しないよう強い「個人」をもとめ、この時期までの江藤は、後に反目する大江健三郎と蜜月な関係にあるなど、戦後進歩主義者の共鳴者とみられるような思想的立場であった。しかし、1962年から1964年までのアメリカ留学を経て1967年の「成熟と喪失」により近代日本社会を「母の崩壊」という観点から論じ、「父」であるかのように振る舞う「治者」としての生き方を説き、保守主義者の相貌をあらわすにいたる。

この江藤の思想の変容について、平山周吉は「安保後に（というよりも安保批判の中途から）「戦後」を疑い始めた」（平山［2019：409］）と指摘し、後に戦後批判を行う江藤のその萌芽をとらえている。

江藤は「現代の日本では、一方の奴隷になるのを免れようとすれば、殆ど必然的に他方の奴隷になってしまう」（六19）と、保守派か進歩派かの旗幟を鮮明にしなければならなかった当時の言論状況について述べており、この言説から当時においても江藤が一面的な進歩派文化人という区分だけでは回収され得ない思想性を有していたことをうかがわせる。

本章で考察した進歩主義的文化人とみられていた時代の江藤は、政治の過剰を警戒し、「個人」が政治の原理に絡め取られてしまうことを危惧していた。しかし、江藤は60年安保以降に思想的に大きな転換点をむかえ、「アメリカ」体験のなかで「明治のナショナリズム」の価値を見出し、帰国後に「成熟と喪失」において、「母の原理」の崩壊、そして「治者」としての生き方を説く保守主義者へと思想的変容をとげていく。何故に江藤は思想的変容をとげるにいたったのか。その過程を考察することで、江藤の保守主義とはいかなるものか、江藤の理想とする「治者」とは、「転向」前に重視していた「個人」観からどのような変容をとげたかをあきらかにしたい。

江藤は2年間の「アメリカ」体験を経て、「明治のナショナリズム」に至る。単なる欧米的近代への反発としての「明治」への回顧ではない点に彼の「ナショナリズム」の特色があり、その選択の軌跡を次章にて考察する。まず第1節にて、江藤の2年間の「アメリカ」体験により、「明治のナショナリズム」を志向するにいたる過程を江藤自身の言説を中心に読み解いていく。

# 第2章　保守主義者への「転向」アメリカ体験から「成熟と喪失」へ―「治者」としての生き方―

## 第1節　アメリカ体験による「明治」の発見

前章で考察したように、江藤は60年安保の頃までは「若い日本の会」を結

成し、進歩主義的な思想をもった批評家と一般にみられており、「政治的季節の中の個人」もそのコンテクストの中で書かれたということができるであろう。江藤が保守思想家へ転ずる直接の転機となったのが、1967年に近代日本社会を「母の原理」の崩壊、「治者」としての生き方という観点から論じた「成熟と喪失」であった。

それより前の1962から64年にプリンストン大学に在籍し、63年の一時帰国をはさんだ2年間のアメリカ滞在が江藤のその後の思想的「転向」に大きく影響を及ぼしたと考えられる。本章では、江藤の思想変容の契機となった「アメリカ体験」と、江藤の「戦後日本」に関する見方が凝縮された「成熟と喪失」の考察を行うが、本節ではまず江藤の思想変容に大きな影響を与えた「アメリカ体験」について検討する。

上野千鶴子は「「アメリカ」は日本にとって、というよりは江藤にとって、運命的な「他者」である」（上野［1993：275］）と分析している。江藤は、皮肉なことに「運命的な他者」ともいえる「アメリカ」から次に考察する「明治のナショナリズム」を想起したといえるだろう。

従前型の保守派が重視していた「国家」や「家族」に代わり得る新しい共同性のモデルとして、江藤が見出したのは、1つに「アメリカ」と2つ目に「明治のナショナリズム」であったと指摘されている（小熊［2002：698］。アメリカ滞在を経た江藤（『アメリカと私』は帰国後の言説。『アメリカ通信』はアメリカ滞在中の言説。）に、その点に関わる言説がみられるため引用する。

江藤は「アメリカ」について、「どうやら私は、かって空気のように自然なものと感じていた社会をどこか「異質」と感じるほど深く米国の社会につかってしまっていたらしい」（四9『アメリカと私』「適者生存」1964年9月6-11月8日　朝日ジャーナル）と述べている。しかし、その一方で、「私は本質的に彼らの外側にいて、内側にはいない」（四29「大学」）とも述べている。この江藤の米国社会の生活に浸透しながらも、米国社会という「他者」にたいする疎外感、この相反する感情が、帰国後の思想的「転向」になんらかの影響を及ぼしていると思われる。

さらに、江藤が日本の批評家であったことがほとんど知られていなかったことにたいして、「もし私が批評家という自己の同一性に固執しつづけようとするなら、そうそう受身になりっぱなしでもいられなかった。（中略）米国の社会で何の機能も果さないのであるから、固執しようとするかぎり私はこの社会で死んでいるわけである。」（中略）「社会的な死を体験」（四38-39「城」）したと吐露している。

このアメリカ滞在において、「自己同一性」の危機を感じたという江藤の体験に関連して、小熊は「「自己同一性」という言葉を、江藤はすでに一九七〇年から使用しているが、そうした言葉で国家を語ることは、旧来の保守論者にはなかったものであった」（小熊［2002：200-656］と指摘している。この「自己同一性」という観点は、従前の保守派にはなかったものであり、後年に江藤が主張するこの保守論調は、このアメリカでの「社会的な死」という体験が端緒になっていたと推量される。

しかし江藤は、アメリカ留学2年目にプリンストン大学の東洋学科で日本

文学の講座を担当（四61「東と西」）することになり、「自己同一性」の回復をも体験する。前章で中島が指摘した江藤の生涯のテーマである「喪失」と「回復」を、江藤は「アメリカ」でまさに自己体験したのであり、この体験は帰国後ほどなくして書く「成熟と喪失」の主題につながっているということは想像に難くないであろう。

江藤は「米国の社会は、それでもなお西洋文明の外側にいる私までも呑みこんで行くような清濁あわせ呑む同化力を持っていた」（四60）と考えている。江藤は「私は激しい生存競争に立向って行く実直で孤独な米国人たちが好きであるが、この好意は決して私を合衆国の「理想」に共鳴させるほど熱烈なものとはなり得ない。どれほど巨大な同化力を持っているとしても、合衆国とは他人の国である。私はこの国と不幸な恋愛をするぐらいなら、親しい友人にとどまっていたい」（四140）とも述べている。

江藤は、米国社会、米国人に好意をもちながらも、あくまでも「アメリカ」を「他者」として認識し、その関係を規定し一線を画していたといえるが、何故に共同性のモデルとして「アメリカ」を選択しなかったのであろうか。

江藤は「私は、ふと自分が明治時代に投げかえされたような幻覚を感じた。士族出の、あるいは新しい知的士族たらんとする「書生」たちが、ウェブスターの辞書を前にして、いわばlearnings in the Nation's Serviceを想っていたあの時代―つまり、私は、そのときほんの一瞬の間ではあったが、周囲に士族の雰囲気とでもいうべきものを感じたのである。が、それは単に、あまりに反士族的なものが充満している東京から来た私が、異質の学園に触れて、自分のなかで眠っていたなにかを喚び覚されたために感じた幻覚だったかも知れない。幻覚であるにせよ、それは快い体験であった。私は、ここには依然としてあり、戦後の日本からは消え去ってしまったある精神を想った」（四32「大学」）と述べているが、江藤が体験した精神とはいかなるものであったのか。

江藤は、明治の時代の士族や書生たちは有していたが、戦後の日本においては「喪失」してしまったようにみえる私心を抑制し、「公的」な義務の要請にこたえていく公共心に類似したものを、プリンストン大学の学生たちのエートスに見出し、アメリカ体験において、「明治のナショナリズム」をも発見し、その共同性のモデルを選びとったといえる。

江藤はフィラデルフィアの東洋学会で以下の内容の論文を発表した。「私は、日本の近代文学が、その西欧への志向にもかかわらず、あるいはむしろその故に、強固に持ちつづけている日本への復帰の衝動」（四62）と分析している。さらに、江藤は「アメリカ」体験について、「私が、自分のなかの日本をとり戻して行く過程」（四56）と、「アメリカ」という価値観だけでは回収できない帰国後の思想変容を予見させるような言説をしている。

以上のように、アメリカで見出した新しい共同性のモデルである「アメリカ」と「明治のナショナリズム」について、江藤が「アメリカ」体験によって選択したのは、「明治のナショナリズム」というモデルであった。

引き続き、江藤の「明治」への傾倒を裏づける関連する江藤の言説をアメリカ滞在中に書いた『アメリカ通信』（1962年9月-1964年9月）から読み解く。この江藤のアメリカ滞在の後半期に書かれたのが「国家・個人・言葉」（1964

年6月14-16日-朝日新聞）であり、江藤の「個人」と「国家」観が如実にあらわされているため、検討を行う。

江藤は「「留学」の意味の変化に含まれているのは、国家と個人―あるいは国家と知識人との関係の変化である。鴎・漱・荷三家の外国体験と私のそれとの違いは、とりもなおさず、明治時代とくらべて今日の日本でこのきずなが著しくゆるやかになっている」（四139）、「かって日本に在り、今はないきずなとは、おそらく国家から各個人に発せられる強力な義務の要請である。あるいは、個人が私情をおさえてその要請に応えるときに生ずる劇である。（中略）だが、今日私に対して発せられる外からの強力な声は何もない」」（四140）と述べており、この江藤の認識は、鴎外や漱石の海外留学が、全体への義務の要請から自由ではなかったと、先達の知識人が「強力な義務の要請」に拘束されていたことと比して、自分自身の置かれた状況の違いを感じ、なかば鴎外や漱石らに憧憬していたともいえ、ここにも江藤の「明治」の時代への憧憬がうかがわれる。

江藤は漱石の作品について、「『猫』以後『明暗』にいたる彼の作品は、すべて「遠い所から帰って来た」人によって書かれた」（一179「現代と漱石と私」『朝日新聞』1966年1月4日）ととらえている。そして、「われわれは、ずい分遠くへ来てしまったが、「帰るべき場所」はどこだろうかと、いつしか自問しはじめているのである」（一180）と述べている。

先述したように、かつて進歩派に共鳴していた江藤が、60年安保を境にして、「戦後日本」に懐疑的となり、保守主義へ傾いていったのは、漱石らの明治の知識人が直面していた「国家」からの義務の要請にこたえていくその「公共心」であり、その対照として「戦後日本」におけるその脆弱さであったであろう。江藤は、そのヒントになる具体的な「帰るべき場所」として、「明治」という時代を想定した。

以上、本節でみてきたように、2年間の「アメリカ」体験が江藤を戦後日本にたいして懐疑的とさせ、保守思想家へと変容する下地をつくったということがいえる。アメリカ留学を終えた江藤が、帰国から3年後の1967年に江藤の保守主義の出発点である「成熟と喪失」をあらわし、同書により、江藤は保守へ「転向」したと考えられる。次節では、同書にあらわされた江藤の思想の核心部分である「母の原理」と「父の原理」、「治者」としての生き方という概念の考察から付随する江藤についての3つの論点を後節に抽出する。

まず第3節では江藤の考える「父」・「治者」・「天」の関係とはいかなるものかを、第4節では江藤は何故に「明治の文学」を重視していたのかを検討する。それを踏まえて第3章で、江藤の「保守」の新規性、江藤研究の意義の考察を通じて、江藤の思想を浮き彫りにし、本稿の独自性を示したい。

## 第2節　「成熟と喪失（抱擁家族）」にあらわれる江藤の「母の原理」と「父の原理」「治者」としての生き方

前節では、従前、「国家」よりも「私」を重視していた江藤が、「アメリカ」

という「他者」を通して「明治のナショナリズム」を想起したといういわば逆説をみた。この時期の江藤にはゆずれないプリンシプルが形成されていたといえる。

本節では、江藤の代表作ならびに江藤の保守への「転向」をあらわしたとみられる「成熟と喪失」、とりわけその『抱擁家族』論を主に検討することにより、江藤の「近代日本」さらには「戦後日本」に関する考え方、その問題意識をあきらかにしたい。

上野は「江藤もまた二年間の北米体験ののちに、あたかも日本文化における「父」の欠落を新発見したかのように、息せいて『成熟と喪失』を書き上げ」（上野［1993：277］）と、北米体験から「成熟と喪失」への過程について考えている。

また中島は同書について、「江藤は、1967年に代表作『成熟と喪失』を出版した。テーマは、日本における「成熟」という問題だった。（中略）戦後の日本人が「成熟」を勝ち取ることには、大きな困難があった。アメリカの存在である。アメリカという母に抱かれ、自己決定を放棄した日本は、父になることの不可能性の中にあった。江藤にとっての文学的テーマは、再び政治と隣接することになる。アメリカからの自立による主体の回復という問題である」（中島［2017:278-279］）と、その主題について述べており、江藤にとって「成熟」という問題は、「アメリカ」とのかかわりの中で論じざるを得ないテーマであったと評価できるであろう。

さらに上野は「「成熟」の課題は、江藤にとって「黒船の衝撃」以来の「西洋」に直面した日本の知識人の歴史的課題であった。そして敗戦によって「アメリカの衝撃」を経験した江藤の世代は、漱石からこの課題を受け継いだ」（上野［1993：257］）として、「成熟」を江藤のみならず近代の日本知識人一般との関係についてとらえている。

江藤は「「成熟」するとはなにかを獲得することではなくて、喪失を確認することだからである。（中略）「成熟」するとは、喪失感の空洞のなかに湧いて来るこの「悪」をひきうけることである」（続一23）と、「成熟」についての認識を示している。

同書は、「第三の新人」とよばれる日本の作家の作品を批評したものである（註3）。

江藤は彼ら「第三の新人」について、「「第一次戦後派」は「父」との関係で自己を規定し、不良中学生たる「第三の新人」は「母」への密着に頼って書いた」（続一15「成熟と喪失」と、野間宏や武田泰淳らの「第一次戦後派」と「第三の新人」を比較し、その時代背景の違いによる主題の相違を分析している。

江藤が同書で「第三の新人」の作品群を批評するにいたる時代背景、動機としては以下のことが考えられる。江藤は、「第一次戦後派」の主題とも重なるが、「近代日本の社会が、「父」のイメイジを稀弱化し、敗戦がさらに支配原理そのものを否定した」（続一86）と、近代における「父」なるもののイメイジの揺らぎ、戦後の「父の原理」の崩壊を問題視した。さらには、同書の副題を「母の崩壊」としており、「第三の新人」の主題である「母の原理」の

►3　「第三の新人」とは、第一次と第二次戦後派の作家と戦争体験が異なり、先行する世代が「政治と文学」の関係に敏感であったのに比して、「第三の新人」は「政治と文学」の問題意識は希薄であり、日本の近代小説の主流であった私小説に回帰していったといえる。

取り扱った作品は、安岡章太郎の『海辺の光景』、小島信夫の『抱擁家族』、遠藤周作の『沈黙』、吉行淳之介の『星と月は天の穴』、庄野潤三の『夕べの雲』である。『成熟と喪失』は、特に『抱擁家族』を主たる批評対象としている。

崩壊をも問題視した。同書はこれらの現代小説の批評を通して、母と子のかかわりを分析し、近代思想と日本の「近代」がかかえる問題を提起した批評であったといえる。

江藤は同書において、『抱擁家族』を主たる批評対象としているが、江藤は、同作品において、「単にひとつのものとして存在する」（続一37）、「「化物」になって浮遊している人間」（続一77）と、近代の日本人が「もの」、「化物」になったと形容している。

江藤のこの極端とも思える形容の意図するところは何か。それは、近代の日本人、さらに戦後の日本人というのは、他人との適切な関係性、社会的な役割などを喪失したよるべなき存在であるという認識であり、克服すべき対象として、同作品の登場人物たちに戦後の日本人と「近代」の象徴としてのアメリカの典型をみたといえる。

江藤は「もともと日本の社会の根底をしめていたのが女性的、あるいは母性的な農耕文化だった」（続一67）と、従前の日本型の社会・文化は母子密着の「母の原理」の社会であったと述べているが、「『抱擁家族』は明らかに昭和三十年代の社会心理に底流する深い喪失感を反映している」（続一67）と、同作品の時代背景を考えている。

昭和三十年代とはいかなる時代であったのであろうか。江藤は「昭和三十年代は、まさに日本全国が、「近代化」、あるいは「産業化」の波にまきこまれて、ついに近代工業国に変貌をとげた時代である。この全面的な産業化の過程で、一番大きな心理的原動力となったのが、「置き去りにされる」不安だった」（続一67）とする。このように江藤は「昭和三十年代の急激な産業化」（続一86）の進展がもたらした「自然」破壊によって、社会·文化概念としての「母の原理」が崩壊することを「父の原理」の崩壊と同様に、あるいはそれ以上に重要視していたといえる。

江藤は「たとえば米国でのように、農耕社会から近代産業社会への移行が自然におこなわれたところでは、「自然」や母性がこれほど徹底的に、容赦なく破壊されることはまずあり得ない」（続一68-69）と、米国との比較において、日本の産業化による「自然」破壊がもたらした社会・文化概念としての「母の原理」の崩壊を深刻に受けとめている。

日本社会は、60年安保騒動を大きなターニングポイントにして、それまでの政治の季節から池田内閣以降の経済の季節への移行という時代の変化において、経済優先政策の必然的帰結として、急激な産業化により「自然」が破壊され、社会・文化概念としての「母の原理」が崩壊していったという認識である。

従前の社会から「母」なる「自然」が崩壊し、急激な「産業化」をしていく日本社会の端境期において、『抱擁家族』の登場人物たちが有していた根源的な不安は、「置き去りにされる」不安であった。

しかし社会・文化概念としての「母の原理」の崩壊を危惧するとともに、それと同時にその崩壊なしに日本社会の「成熟」はあり得ないとも考えていたのが江藤の特徴的な点である。そして彼は「成熟」するために「母」なき社会において、「父」であるかのように生きる「治者」としての生き方を説い

た。

## 第3節　江藤の考える「父」・「治者」・「天」の関係について

本節では、江藤の考える「父」・「治者」・「天」とはいかなる関係であるかの考察を行うが、その解明のために前節に引き続き、まず『抱擁家族』に関する江藤の批評から考えていきたい。

同作品の三輪俊介は、妻時子が米兵ジョージと不貞をしてしまったことによって壊れた家の中をなんとか立て直そうとしているが、江藤は「真の「役割」に気づかせてくれるような「他人」の視線は、どうしてこの二人の前にあらわれないのか。要するに「父」であるかのような絶対的な「他人」の視線」（続一54）と、「自然」の象徴である「家」を建て直すのには「父」であるかのような絶対者の必要性を述べている。

江藤は、その上で「「母」にしか価値観の基準がない自然状態のなかで人は「化物」になるほかない」（続一59）、「三輪俊介は彼自身一個の「神」にならなければならない」（続一56）と、この時代の俊介に代表される「母の原理」の崩壊に際して、人が好むと好まざるとにかかわらず、選びとらざるを得ない「治者」たる生き方の過酷さについて考えている。

では、「父」・「治者」・「天」の関係はどのように考えたら良いのであろうか。

江藤は明治の文学者たちを評価しているが、永井荷風について、「『墨東綺譚』の世界は、（中略）一篇の情緒が暗示している通りの古典主義的な世界―「季節」＝「天」という男性原理と、「自然」＝「地」という女性原理とが、たかいにあい擁してつくりあげている世界（中略）古典主義的な世界」（続一116）と、「母」なる「自然」と「天」に支えられた「父」＝「治者」との関係について考えている。

江藤は「「母」が崩壊したときはじめて「天」が、つまり「罰する者」としての「父」が求められている」（続一129）と、「母」なる「自然」の崩壊という事態をむかえたとき、「父」＝「治者」という存在が必要になってくると分析している。この点について加藤は、「確固とした日本的自然はすでになく、確固とした日本的近代もまた、まだない、という、そうした「日本」に直面しなければならなかった」（加藤［2009：76］）と、この時期における江藤のかかえた問題を考えている。

すなわち江藤は、従前の「自然」的農耕社会から近代産業社会へ、さらには高度経済成長期のとば口に入った日本社会の移行期をむかえ、このような社会の大転換を背景にして、「父の原理」のみならず「母の原理」をも崩壊した日本社会において、人は何を拠り所として「成熟」していくことが可能であるか、といった大きな問題に直面した。

江藤は「なにものかの崩壊や不在への「恐怖」のために、人は「治者」の責任を進んでになうことがある」（続一143）と、「治者」なる存在について言及し、「母の原理」が「崩壊」していくなかで、「治者」として生きることを選択した。

江藤は、まず「近代の政治思想が実現すべき理想として来たのは、近代以

前の「被治者」を一様に普遍的に「治者」にひきあげようとすることである（続一139-140）と、「治者」という概念について述べている。

先ほど『抱擁家族』の引用をみたが、そもそも人は何故に、「母の原理」が崩壊してしまうと、「治者」という過酷な生き方をとらなければならなくなるのか。

江藤は「私が以前『夕べの雲』について「治者の文学」といった（中略）もしわれわれが「個人」というものになることを余儀なくされ、保護されている者の安息から切り離されておたがいを「治者」の前に露出しあう状態におかれたとすれば､われわれは生存をつづける最低の必要をみたすために「治者」にならざるを得ない。（中略）最小限の秩序と安息とを自分の周囲に回復しようと試みなければならなくなる」､「隠れ場所というものがない」禿山の上に「全身をさらす」のに等しいこと」（続一139-140）と述べている。

江藤のいう「禿山の上に「全身をさらす」とは、子を守ってくれる「自然」の存在たる「母の原理」が崩壊したよるべない孤独な「個人」を比喩していると思われる。孤独な「個人」から抜け出すためには、「治者」なる過酷な生き方を知りながら、なおその過酷さを選ばざるを得ず、その非常な困難、過酷さが論じられている。

そうすると、江藤が理想とする「治者」なる存在に人はいかにしてなり得るのだろうか。

江藤は「「治者」の、つまり「不寝番」の役割に耐えつづけるためには、彼はおそらく自分を超えたなにものかに支えられていなければならない」（続一143）と述べた上で、「「父」に権威を賦与するものはすでに存在せず、人はあたかも「父」であるかのように生きるほかないのかも知れない」（続一143）とも述べている。

加藤典洋は「「治者」とは、その概念命名の仕方とは裏腹に、けっしてその治める下位対象との関係から定位されているのではなく、上位の「天」ないし、「国家」との関係から定位された概念」（加藤［2009：90］）と、「天」や「国家」という上位の概念の必要性を示している。

江藤は「自分を超えたなにものか」を必要とし、「父」であるかのように振る舞う姿勢を重視していたが、しかし、権威者たる「父」もそして保護してくれる「母」も不在の時代において、人が「「父」であるかのように生きる」ための拠り所とし得る原動力とはいかなるものであろうか。

それを解き明かすためには、やはり「アメリカ」なるものを通して考えざるを得ないと思われる。上野は「江藤が「アメリカ」というシンボルに見るのは、「父の文化」である」（上野［1993：275］）と分析している。

江藤は「農耕社会の「自然」＝「母性」」（続一89）と、日本社会の伝統を自然崇拝の農耕型社会である「母の原理」と規定し、アメリカ社会の伝統は騎馬型社会の末裔であるカウボーイ型の「父の原理」と規定し両者を対置していたが、しかし、江藤はアメリカ社会の「父の原理」とは異なるものではあるが、かつての日本社会においては、「父の原理」に代替し得るような価値観が根づいていたととらえている。それは、儒教的な父性原理である「天」の観念である。

江藤は「「天」の思想は「政ヲ為ス」者の思想、つまり「士大夫」の思想として農耕生活に従事する人々の「道」の思想と相補うもの」（続一88）とも述べており、儒教イデオロギーの伝統を重視していた。

江藤は、「父」に権威を賦与し得る「自分＝人智を超えたもの」として、「天」を想定していたと思われ、上野も、「日本が、少なくとも明治までは、儒教的な父性原理、天をいただく社会」（上野［1993：257］）であったと、江藤と同じ認識を示している。

江藤は『抱擁家族』の俊介について、「彼には「母」もなければ、「父」もない。ただ「家」だけがあり、その中を治める手がかりを俊介はどこにも見出せない」（続一86）と、その苦悩を整理した上で、「家に欠けているのはおそらく「父」である」（続一86）と、俊介の苦悩を救い得るのは「父性原理」であると考えていた。

江藤は、俊介が有しない「父性原理」を有したその対象をなす存在として、漱石らの明治の文学者に着目したと思われる。江藤は主たる研究対象にしている漱石について、彼の小説の構成を支えているのが、（中略）原初的な母性原理である「道」ではなく、（中略）儒教の超越的・父性原理「天」であったことは確実だったものと思われる。（中略）そして、漱石が「父」の背後にいる超越神という視点を有していたことに関して、「漱石はいったいなににによってそういう視点を得たのであろうか。それが時代とその背後にある世界像に支えられている」（続一87）と、述べている。

江藤は、その上で「漱石が儒教の「天」の基軸をその作品に内在させていたのは、彼が江戸時代以来「士大夫」の必須の教養とされた漢学の世界像のなかで育っていたからである」（続一87）、「漱石はそういう文化の中で彼の世界像の中核をかたちづくっていた」（続一88）、「漱石文学の核に潜んでいるのは、（中略）倫理的に表現されれば儒教的な正邪曲直の観念」（江藤［1979：280］）と、英文学者漱石を「近代」の台頭により揺らいだ「士大夫」的教養をも有した知識人であり、漱石の思想のバックボーンには儒教の「天」の価値観が根づいていたと分析している。

江藤は、「父」の存在について、「父はかって私にとっての最初の他人であり、また私と他人との、つまり社会というものとの通路であった。私は社会や、国家やさらにその向うにひろがる世界についての最初の感覚を、おそらく父から得ているにちがいない」（続一211「戦後と私」『群像』1966年10月）と述べている。自身にとって「父」という存在を「他者」として認識するという「感覚」とは、「私的」な「母」なる「自然」とは異なる「公」＝「社会」や「国家」へのとば口としてとらえていた、といえるであろう。

それでは江藤が、「治者」たるために「父であるかのように」と考える社会・文化概念としての「父」とはいかなる存在であろうか。

江藤は「「責任」と「倫理」と「契約」の上に成立する秩序は「父」である「神」の視線の下にしか生れない。つまりそれはそのなかで各々が「役割」をあたえられるような秩序であり、禁止と限界によって支えられた体系」（続一57-58）と、「社会」において個々人がその適切な「役割」を果たすことをもとめており、そのような公的な秩序化された「社会」を形成する原動力と

して「父の原理」をとらえていたと思われる。

そして、この「父の原理」は、第1節でみた国家から各個人に発せられる強力な義務の要請の基盤たり得る原理でもあるだろう。

小熊は「江藤が唱えたのは、国民の側が一方的に、「国家という超越者に対する忠誠」を示すことであった」（小熊［2002：710］と指摘している。小熊の指摘にあるように、江藤の「治者」としての生き方を理想とする保守主義は、具体的な忠誠の対象として、「「自分」＝「個人」を超えたなにものか」として、「父の原理」である「国家」への忠誠をもとめていたといえる。

江藤が「治者」たり得るために「自分を超えたなにものか」という存在を必要条件としているが、それでは、「治者」という生き方としての「自分を超えたなにものか」と、「父」という意味での「自分を超えたなにものか」とは、いかなる関係性を有しているのであろうか。

それは非常に難題ではあるが、主に江藤が高く評価する漱石をはじめとする「明治の文学」にたいする具体的な引用から解き明かしたい。江藤は「治者」について、「大空にひろがる星が北極星にむかっておじぎをしている美しいイメイジ」（続一87）と、「治者」の概念について「イメイジ」ということを重視している。

「父の原理」が崩壊した時代において、その原理を構築、あるいは再構築するために江藤が有していた「イメイジ」とは何か。彼にとって、かつての日本社会に存在した「士大夫」という儒教的な「父の原理」こそが、父に権威を賦与し得る原理である。それを具体的にイメイジできる時代として彼は「明治」に着目し、「父の原理」を具体的にあらわしたものとして、漱石をはじめ「明治」の文学を重視した。

江藤は「文学を通してみた明治という時代の特色はどうか。（中略）国民の生き方に理想のあった時代」（続三155「日本文学と「私」『新潮』」1965年3月）ととらえている。

さらに、江藤は「明治の作家たちは、その生活と思想のほとんどあらゆる位相を、圧倒的な西欧文明の影響下に晒した最初の日本の知識人であったにもかかわらず（中略）つねに日本人としての文化的自覚を失わず、一種強烈な使命感によって生きていた人びと」（続一134）と、漱石らの明治の作家たちを「日本人としての文化的自覚」という公的な使命感を有した人たちと考えており、また、漱石の「こころ」について、「漱石同様明治の教養人・知識人であった「先生」は、自殺を決行するにあたってさえ、孤独からの逃避という単なる個人的な動機を超えた動機を必要とした、（中略）彼は去り行く明治の精神のために死ななければならなかった」（続一149）とも述べている。

このように、江藤は、漱石をはじめとする「明治」の作家たちを西欧的教養とともに、儒教の「士大夫」の教養をもあわせ持った公的な「父」の原理で生きる「治者」として考えている。

江藤は「儒学、特に朱子学の倫理によれば、人間存在の意味は、人間の超越的な「天」に対する関係によってのみ決定される。もし、人間が致命的に「天」から切り離されてしまえば、彼は超越的な価値の源泉と断絶することになり、まったく無価値な存在となる」（一143「明治の一知識人」現代文学大系「夏

村部 貴浩 MURABE Takahiro

目漱石2』『筑摩書房刊』1964年12月)、「「父」の背後に超越的な「天」を視る感覚」(続一89)と述べている。

江藤のこれらの言説から、「父」と「治者」は類似した概念ではあるが、「父」の存在は、母や子といった「自然」に支えられているのにたいし、「治者」は「国家」＝「天」といった容易ならざるものを支えにしているという点で相違しているといえる。

そして、「父」であるためには、超越的な「天」という感覚が必要であり、それにたいして、「国家」＝「天」といった公共性を支えるには、「父」という存在が必要であり、この両者は、お互いに支え支えられるといった相互補完的な関係と整理できるのではないだろうか。人は「国家」＝「天」の後ろ盾があればこそ「父」＝「治者」として、「美しいイメイジ」を持ってよく生きていけるという認識なのであろう(註4)。

►4 加藤は「「父」がいわば自然性にささえられているのにたいして、「治者」が国家というような自然ならざるものを必要とすることにある」(加藤[2009-116])と、「父」と「治者」の関係を分析している。

## 第4節　江藤にとっての「明治の文学」について

それにしても、江藤は何故に「明治」、「明治の文学」をこれほどまでに重視したのであろうか。前節後半の議論と重複する部分もあるが、江藤の思想の重要論点であり、江藤の保守主義の「保守」するべきものとは何か、ということにもかかわってくる論点であるため、考察を続ける。

江藤が「明治」という時代を理想としたのには以下の歴史的背景があるように思われる。幕末の黒船来航という列強諸国の圧力によって明治維新をむかえた「明治」の日本は、国家の独立を維持するため早急な近代化をもとめられ、その近代化は西欧化を意味するものであった。

「明治」の日本が志向した近代化・西欧化は、富国強兵、殖産興業政策などのスローガンによって、外面的には一定の成果を得たということができるであろう。しかし、外面的な成功とは乖離し、こぼれおちてしまった内面の問題が、特に明治の後半三十年代からあらわれてくるようになり、その外面的な近代化・西欧化だけでは回収し得ない内面の問題に真摯に向き合ったのが漱石をはじめとする明治の文学者たちであったといえるであろう。

江藤は、「アメリカ体験」により、「明治の文学」に言葉の連続性を発見したことが保守主義への「転向」をもたらしたといえるが、特に近代の持つ光と影を直視した漱石の研究を自身の主たる研究、ライフワークとしたことは必然的な関連性を有していたと整理できるであろう。

江藤は荷風について、「荷風散人が「文学」という観念の向こう側にあるものを見る眼を持ち、そこでなにが喪われて行くかを明晰にとらえていた」(続一116)との文学観を示している。

江藤は、先に引用した「「父」に権威を賦与するものはすでに存在せず、人はあたかも「父」であるかのように生きるほかないのかも知れない」に続き、「彼は露出された孤独な「個人」であるにすぎず、その前から実在は遠ざかり、「他者」と共有される沈黙の言葉の体系は崩壊しつくしているのかも知れない。だが近代のもたらしたこの状態をわれわれがはっきりと見定めることができ、「個人」であることを余儀なくされている自分の姿を直視できるようになったとき、あるいはわれわれははじめて「小説」というものを書かざるを得なく

なる」（続一143-144）と考えている。

江藤は「文学の公的役割を信じていた漱石にとっては、「公」あるいは「国家」につくす上で文学・政治の別はなかった。（中略）「公」あるいは「国家」のための文学」（続三167）といった公的な「父の原理」としての漱石観を有している。これは、特に漱石が晩年に示した「則天去私」という境地に根差した文学観を指していると思われる。

このように、江藤の漱石観は、文学者であると同時にナショナリストとしてもとらえ、漱石に代表される「明治の文学」に文学とナショナリズムの結節点を見出したと同時に、そこに「治者」としての生き方の「美しいイメイジ」もみたといえるだろう。

# 第3章　江藤の思想の新規性・その研究の意義、本稿の新規性について

これまでみてきたように江藤の保守主義というのは、江藤の理想とする「治者」としての生き方を基盤にしている。

江藤は「保守とは感覚である」（江藤［1996：22］）と保守主義を定義している。江藤は「「理念」が男性の原理であるなら、「心理」と「感情」は女性の原理とでもいうべきものであろう。（中略）歴史を「理念」の歴史としか見ないのは歴史の反面を無視することになる」（続一70）と考えている。「保守」を「理念」だけに一義的に回収し得ない「心理」と「感情」をともなったものととらえていた。

江藤は「私にしてもなんで文士稼業を四十年もやっているのかといえば、この失われた風景を想像裡に復元する場所は言語空間の中にしかないと思い定めたから（中略）脳裡にまざまざと今も甦るあの懐かしい風景を他の人々と分かち合うためには、もはや文字の助けを借りるしかない」（江藤［1996：165］）と述べている。

江藤が「失われた」と考えている「懐かしい風景」を江藤は具体的な時代として「明治」の時代に見出し、「自分を超えた大きなもの」、「現在を超えてある時間」としての連続性を特に「明治の文学」の連続性に見出したといえる。この具体的な時間「感覚」こそが、「保守」を「感覚」ととらえる江藤の保守主義の特徴であり、江藤研究の意義を見出せると筆者は考える。

本稿は、時系列的に江藤の思想変容の過程を考察してきた。第1章にて江藤が保守に「転向」する以前の進歩主義的文化人の共鳴者とみられていた時代の著作である「政治的季節の中の個人」を主に検討し、当時の江藤が「個人」を重視し、政治的原理の中に絡め取られてしまうことへ警鐘を鳴らしていたことに着目した。

しかし、第2章でみた「アメリカ」体験を経て、江藤が選びとった共同性のモデルは、「アメリカ」ではなく、「明治のナショナリズム」であり、その後の思想変容に大きな影響を与えた。

江藤は「アメリカ」なるものを「近代」の象徴であると考えていた。江藤にとって「近代」とは、他者との適切な関係性や社会的な「役割」といったものを希薄にした時代であるというのが、江藤の「近代」批判の骨子であるだろう。それ故、日本の近代化のとば口において、「近代」という観念だけでは還元し得ない公的な要請の中で社会的な「役割」とは何かを求めた漱石らの明治の知識人に着目した。

江藤は、60年安保の時期の日本社会の「産業化」による社会変動がもたらした「自然」破壊によって、社会・文化概念としての「母の原理」が崩壊することを問題視した。

この大きな日本社会の変動期に際し、『成熟と喪失』、とりわけ『抱擁家族』の批評において、従前の江藤が重視していた「個人」では回収し得ず、彼は「治者」という存在の過酷さを知りながら、それでもなお「父」であるかのように振る舞う「治者」の過酷さを選ばざるを得ない切実さを描いたことが同書の骨子であったであろう。

江藤は、「治者」たり得るために「自分を超えたなにものか」の支えを必要とし、かつての日本社会においては、儒教的な父性原理である「天」の観念、「士大夫」の思想という「治者」としての生き方の伝統があったと認識していた。そして、「治者」としての生き方を抽象論・理念的なものに終わらせずに、具体的なイメイジできるものとして、漱石をはじめとする「明治の文学」のもった公的役割の意義を見出し、文学とナショナリズムの結節点を見出したといえる。

「保守」を「感覚」ととらえる江藤の保守主義者は、このような時代背景の中でかつての日本社会に存在した古き良き価値を「保守」するため、「治者」という過酷な生き方を志向するように変容した。その詳細な過程と江藤の「保守」するべきものとは何かを明らかにした点を本稿の新規性としたい。

## むすび―残された課題―

以上、考察してきたように、江藤は、60年安保の頃までは進歩主義的思想傾向を有し、「政治」の原理にたいし「個人」を重視していたが、2年間の「アメリカ体験」により、「アメリカ」という「他者」を通じて、「明治のナショナリズム」を発見、あるいは再発見し、思想的変容をするにいたった。

それは、戦後の「父の原理」の崩壊のみならず、60年安保の時期の日本社会の大きな変動期における自然破壊、産業化、高度経済成長のはじまりという社会変動を背景にして、江藤は、従来型の保守派が見出さなかった「母の原理」の崩壊という観点を有したことが思想変容に大きな影響を及ぼした。

産業化の進展による社会・文化概念としての「母の原理」の崩壊、その深刻な現実を前にして、江藤は、かつての日本社会にあった古き良き価値を死守する、あるいは取り戻すためには、「個人」という存在では還元できず、「自

分を超えたなにものか」としての「国家」＝「天」を後ろ盾とし、「父」であるかのように振る舞う「治者」としての困難な生き方をもとめるにいたった。

江藤にとって、「治者」という存在に具体的な「イメイジ」を与えているのが、漱石らの公共心を有した「明治の文学」に代表される「明治」という時代であり、その「父」であるかのように振舞う「治者」としての生き方こそが、江藤のたどりついた「保守」の価値といえるであろう。

江藤は「母の原理」の崩壊を危惧しているが、それ以上に「母の原理」の崩壊を日本社会が「成熟」する好機ともとらえていた。江藤の考える「成熟」とは何を意味するのか。江藤は、「成熟」するために「治者」たる生き方をもとめているが、それは、「母」なる「自然」が「喪失」したという現実を厳粛に受けとめた上で、戦後うしなわれた「父の原理」としての「国家」に真摯に向き合うことが「成熟」することである、と言い換えられるのではないだろうか。

江藤は「成熟と喪失」の最後に、「母の原理」の崩壊にたいして、2つの道を提示した。

1つに「治者」としての道と、2つ目に「個人」としての道である。この2つの選択肢から江藤は「治者」という過酷な生き方をとったといえる。

江藤は「保守」を「感覚」ととらえており、江藤の保守主義の根幹をなしているのが「治者」という存在である。江藤の保守主義、「治者」の生き方として、「成熟と喪失」以降、「一族再会」そして「海は甦える」へと「自分を超えたなにものか」としての「国家」＝「天」を評論対象にしていったのは必然的帰結であったと思われる。

従前「個人」を重視していた江藤が、「アメリカ体験」を経て、戦後日本に懐疑的な見方をするようになり、「成熟と喪失」によって、「個人」に否定的な言説をし、かつての日本社会に存在した古き良き価値を「保守」するため、「治者」という過酷な生き方を志向するように思想変容したというのが本稿の立場である。

しかし、江藤が考える「治者」とは、必ずしも具体的な為政者を指している訳ではなく、「治者」と「被治者」にわかつのは、「治者」としての過酷な生き方を自己に課す志向性を有した人とそうでない人との違いであったと思われる。その意味では、「保守」に「転向」したとみられた後も「転向」前のように「強い個」の存在をもとめており、その点で一貫していたという見方も可能であろう。

総じて江藤研究は蓄積が少なく、基礎研究も不足している現状であるが、江藤の「個人」観と「治者」としての生き方をどのようにとらえるかということは、戦後日本における保守主義研究の上で有意義なものであると思われる。

江藤が「成熟と喪失」の批評をした時代背景としては、日本社会が高度経済成長期のとば口を迎え、従前の農耕社会を基盤にした「自然」が崩壊し、「産業化」していく時代の過渡期であったが、それから半世紀が過ぎ、とうに高度経済成長期を終え、減退に向かっていく日本社会において、現在における「成熟」とは何か。今日、江藤の「母の原理」の崩壊、「治者」としての生き

方という観点をどのようにとらえ得るか、そして、それがどのような形で後継世代に継承されているかの検討も含めて、引き続き今後の研究課題としたい。

## 参考文献


『江藤淳著作集一巻～六巻』講談社　1967年
『福田恒存在全集第一巻～第八巻』文藝春秋　1987-1988年
江藤淳『近代以前』文藝春秋　2013年
江藤淳『国家とはなにか』文藝春秋　1996年
江藤淳『漱石の文学』新潮文庫　1979年
江藤淳『保守とはなにか』文藝春秋　1996年
上野千鶴子　江藤淳『成熟と喪失』解説　講談社　1993年
小熊英二『民主と愛国』新曜社　2002年
加藤典洋『アメリカの影』講談社文芸文庫　2009年
加藤典洋『敗戦後論』筑摩書房　2015年
柄谷行人「江藤淳論―超越性への感覚」柄谷行人「畏怖する人間」冬樹社　1972年
小浜逸郎『ニッポン思想の首領たち』宝島社　1994年
小谷野敦『江藤淳と大江健三郎』筑摩書房　2018年
塩谷昌弘『江藤淳「西洋の影」試論』北海学園大学人文論集（51）　2012年3月
塩谷昌弘『江藤淳「アメリカと私」論：変容する「私」』北海学園大研究紀要第05号　2008年12月
先崎彰容『ナショナリズムの復権』ちくま書房　2013年
高澤秀次「戦後知識人の系譜7福田恒存「上」」『発言者』　1995年2月
月村敏行『江藤淳論』而立書房　1977年
中島岳志編『戦後日本の思想水脈7現代への反逆としての保守』岩波書店　2017年
中島岳志『保守のヒント』春風社　2010年
西部邁『保守の辞典』幻戯書房　2013年
西部邁『保守の真髄』講談社　2017年
橋川文三編『保守の思想　戦後日本思想体系7』筑摩書房　1968年
橋川文三『ナショナリズム』紀伊國屋新書　1968年
浜崎洋介『福田恒存思想の〈かたち〉』新曜社　2011年
平山周吉『江藤淳は甦える』新潮社　2019年
福田和也『江藤淳という人』新潮社　2000年
松井邦子「江藤淳の「保守主義」について」『相愛女子短期大学第47巻』131-145頁　2000年3月
『丸山眞男集　第七巻』岩波書店　1996年
『山崎正和著作集7』中央公論社　1981年
『吉本隆明全著作集7』勁草書房　1968年
『吉本隆明全著作集14』勁草書房　1968年
ロバート・ニスベット著　富沢克・谷川昌幸訳『保守主義―夢と現実』昭和堂　1990年


（令和3年4月23日受理、令和3年8月20日採択）